

## 第4.1節 長谷川町子（サザエさんの作者）

2023年10月 第70号

## 4.1.1 町子の家族

生涯独身だった町子には、3歳年長の姉毬子（まりこ）と5歳年下の妹洋子がありました。母貞子がマネージャーの役割で、原稿や取材の依頼などに対応しました。依頼を受けるかどうかの判断は貞子の仕事でした。姉の毬子は町子の作品を専門に出版する姉妹社を切り盛りしていました。妹の洋子は姉妹社の経理を担当し、さらに雑用を担い、町子の漫画を読んで批評もしました。姉も妹も、それぞれに自分のキャリアを犠牲にして長谷川町子というブランドを支えていましたが、賞賛を浴びたのは町子だけでした。

町子は最後まで一緒に暮らし、密葬を取り仕切ったのは姉の毬子でした。妹の洋子もずっと同居していましたが、昭和50年代の半ばからは、一切表舞台に登場しなくなりました。もともと町子は引込み思案で、人付き合いが苦手だと公言していました。彼女の死後に追悼の言葉を寄せた漫画家の多くが、町子は滅多にパーティにも表れなかったし、漫画家協会にも所属していなかったと語っています。色恋の噂すらなく、ひたすら仕事に取組む乙女の様に清純な女性だったというのが、おおむねの人物評でした。

父勇吉は三菱炭鉱の技師で、町子は1920年（大正9年）佐賀の多久市で生まれました。独立してワイヤーロープの事業をしていた勇吉は博多（現在の渡辺通3丁目付近）に住み、お手伝いさんが2人位いて裕福でした。勇吉はチョビヒゲをはやしてハンサムできりっとし、とても子煩悩だったそうです。貞子の性格を町子は「神様日の丸」と形容しました。つまり神様を頼っていれば生活の心配はないと思い込んでいるとの意味です。とにかく貞子は基督教の熱心な信者で、貧しい人、困っている人にどんどんお金をばら撒きます。その結果、何が起きたでしょうか。一家は生活に窮したと町子は書いています。ある日突然、貞子は空の預金通帳を娘たちに見せ、「さアこれですっかりなくなったよ、どうする？」、そう訊かれても、娘たちは答えようがありません。アパートの1、2軒は立つくらい貯えをもって、福岡から上京したはずなのに姉の毬子は思わずのけぞりました。

母貞子は無類の不動産好きでした。もともと一家が上京した時は無一文だったといいながら、しっかり福岡に家作を持っていました。不動産に関する鑑定眼は鋭く、町子は「サザエさんうちわけ話」で箱根の別荘の顛末を語っていました。ある日、「ワンマン」というあだ名の貞子がふらりと箱根に出かけたと思ったら、別荘を買ってきて娘たちの度肝を抜きました。これが1952年（昭和27年）のことと思われます。翌年には、その別荘で、洋子が読売新聞経済部の記者とお見合いをしたと町子は書いています。

貞子の行動はいつも速攻が決めてです。この時も箱根の小涌谷（こわくだに）の駅を降りたら、畳屋さんと出会い、「いいところですね。この辺に売り家でもありませんか？」と尋ねると、ちょうどい

いのあると答えて案内された家を気に入って「決めてきちゃった」と言うのでした。

### 4.1.2 サザエさん

サザエのモデルは姉の毬子（まりこ）で、楽家家で親切だったそうです。母貞子はフネ、妹の洋子はワカメとされています。明るい 家庭の理想像を求めていたのでしょう。

「週刊朝日」（1949 年（昭和 24 年）3 月 13 日号）に掲載された「サザエさんと私」の中で、「疎開先の福岡では、すぐ裏が海だった。妹（肺浸潤を患っていた）と砂浜に寝ころびながら連載の骨組を考える。登場人物名は皆海産物の中から選んでつけた」と「サザエさん」の名前を考え付いた理由の種明かしをしています。しかし妹の洋子は「サザエさんの東京物語」の中で、はっきりと指摘しているのが、「愛読していた志賀直哉氏の『赤西蠣太（あかにしかきた）』に登場する御殿女中が『小江（さざえ）』という名前であったことと、私たちの住まいが海岸の側にあったことから、姉は主人公の名前を『サザエさん』と決め、家族の名も、すべて海にちなんだものから選んだ」です。

1946 年（昭和 21 年）12 月に姉妹社が設立され、翌年の 1 月 1 日に単行本『サザエさん』が出版されました。東京に転居して 4 か月余りでの刊行でした。ところが、ここで姉妹社の思惑は外れました。版型が普通の単行本と違うので、店頭に並べられないという理由で、本屋からどっと返品されました。たちまち長谷川家は在庫の山となり、庭に小屋を作っても、まだ家中に本が溢れている有り様でした。だが、これでへこたれるような貞子ではありませんでした。

4 月には普通の単行本サイズの『サザエさん』を刊行しました。この資金は知り合いの出版関係者から借りたそうです。これが大当たりをして、なんと 1 か月に 17 万部も売れるベストセラーになりました。書店は、版型が違ってもかまわないから在庫の『サザエさん』を回してくれと頼んできました。家中に積上げていた B5 版の方もすぐにはけました。

1949 年（昭和 24 年－昭和 25 年説もあり）11 月には町子たちは桜新町の新居に移りました。600 坪の土地に 2 階建ての家を建て、「サザエさん」は増刷に次ぐ増刷でした。朝日新聞に「人物天気図」を書いていた斎藤信也によると、サザエさんの人気の由来とは、「それは黒砂糖の味。白砂糖より滋養があり易い。庶民から圧倒的に受けるゆえんだ。甘納豆まで行かないが、カリントウの味。ドロ臭いがウマイ。天二物を与えず、家庭漫画としておそらく当代一の



（世田谷区桜新町の銅像）

すばらしいアイディアと、気のきいた女学生なら書けそうにも見える画」として紹介しています。感想を書き加えたのは有名なニュースキャスター古谷剛正（1912-1989 父は外交官）です。「さらに筆者の蛇足を加えさせてもらえば、その幼稚な画がまた読者に気安さを与えて、さらに人気に拍車をか

けるのであろう」。

#### 4.1.3 若き日の町子

町子は、ちょっとそそっかしくてお転婆さん。すこしわがままで茶目ッ気たっぷり、授業中も先生の話はあまり聞かないで、教科書をたてて、そのかげで先生の似顔を描いていたそうです。だからいつも注目されていて「コラッ、長谷川、何シトルカ」と白墨を投げつけられ、廊下に立たされました。そのウップンばらしに、先生のクセを漫画で描いて、ほかの子にまわせと言うのですが、言われた子は困ってもじもじしていると、ひざをつねられるので、決心してそっとまわしたそうです。



(高等女学校時代)

教室の掃除当番では机を隅に寄せて床の雑巾がけをしますが、町子は全然しません。同級生の雑巾がけを横目に見ながら、広くなったところで男子達とチャンチャンバラバラをしていました。同級生が「長谷川さんも手伝ってよ」と言っても、「そんなものいいじゃない…」と相手にしませんでした。「いじわるばあさん」の素質がその頃からあった様です。しかし、女生徒が男子に泣かされると、「義ヲ見テセザルハ勇ナキナリ」と言って、男の子を校舎の屋上に連れ出して降参させたそうです。

町子は当時流行のアイス饅頭を食べたくてたまらない。しかし、貞子が不衛生だといってどうしても買ってくれません。それで貞子が留守の時、お手伝いからお小遣いを貰い、食べながらニコニコ帰っていると、後ろから誰かに肩を掴まれました。振りかえって見ると、鬼より怖い貞子で、あとは語るも涙だったそうです。躰はとても厳しく、父勇吉は葉隠れの佐賀出身で、母貞子の実家は薩摩の士族でした。いたずらが過ぎると、懲らしめに鶏小屋へ入れられましたが、優しいお手伝いさんがいつも助け出したそうです。

実に町子には執念深い一面が有りました。小学校時代に友人の家の玄関の敷石に、チョークや蠟石(ろうせき)で落書きをしていました。夢中になって描いていると、その家のおばさんが帰ってきて、さんざん怒られて、掃除をさせられました。腹の虫が収まらない町子は泥をこねた「おはぎ」を何個も作り菓子箱に詰めて、わざわざその家にお詫びと称して届けに行きました。町子の復讐です。つまり、子供の頃から根に持つタイプだったと言えましょう。

町子が家出をしたのは1963年(昭和38年)の9月でした。この月の3日に朝日新聞に休載の知らせが届きました。それから10月11日の再開まで1か月以上かかっていました。年譜には「母・サタと喧嘩して家出」と記されていました。「サザエさん旅あるき」「家出」と題した漫画と文章が収録されていて、その一端が窺えます。「だれがこんな家にいるもんか出ていく!!」と怒る町子に、腕組をした貞子が「あー出ていけ!!」と答えるシーンで始まります。喧嘩の原因は思い出せないから、些細なことだったとの説明があります。

#### 4.1.4 長谷川町子美術館

貞子が亡くなった時、かなりの遺産が有りました。この相続に対する、長谷川家の対策は見事でした。貞子が亡くなる2年前の1985年（昭和60年）に、財団法人長谷川美術館を開設しています。まだ町子が存命中に、その名を冠した財団を設立するのは、かなり手続きが厳しいのです。それでも強行したのは、おそらく一家が収めた莫大な美術品のコレクションと関係があったのでしょう。ピカソ、シャガール、ルオー、ルノアール等の名品から、日本の平山郁夫、加山又造、横山大観、岸田劉生等、今では個人での購買はほぼ不可能なほどの名品が揃っていました。

財団とはブラック・ホールの様なもので、個人の財産を財団の所有に移行させれば、無限に吸収してくれます。これで相続の問題はほぼ解消されました。町子の仕事柄、一貫としてコレクションした美術品のほとんどは必要経費と見なされ、税金の控除の対象になりました。初めはデパート等を通して絵画を買いましたが、後に直接ヨーロッパに買い付けに行ってくれる知人が現れました。しかし、値段が値段です。間に立った知人に、ずいぶん代金をごまかされたと晩年の毬子は憤っていました。バブル時代を背景とした日本なら、十分に考えられる事でした。この長谷川美術館は町子の死後、長谷川町子美術館に名前が変わり、1994年（平成5年）に姉妹社は解散しました。

あらかじめ死亡のニュースは聞いていたのでしょうか。加藤紘一官房長官が長谷川町子に国民栄誉賞の授与を検討していると語り、1993年7月7日にそれが内定されました。国民栄誉賞は女性では美空ひばりについて2番目です。訃報の翌年1994年（平成5年）3月20日に新聞紙上で明らかにされた町子の遺産の金額は、世間の耳目（じもく）をそばだてるに十分でした。文壇の頂点を極めた作家の松本清張の17億5900万円や将棋の大山康晴の17億3800万円を抜いて、町子の遺産額は29億8800万円と突出していました。

1971年（昭和46年）には、町子の収入は2453万円と比較的押えられていましたが、姉毬子はいかに1億3273万円というとてもない所得額になりました。なぜか毬子の肩書は「長谷川町子氏妹」でした。1973年（昭和48年）に発表された毬子の前年の所得額は2億2629万円で、町子は1682万円でした、しかし、妹の洋子も1402万円の申告をしていたので、合計で2億5713万円でした。当時としては天文学的な数字です。



（皇居の園遊会にて（昭和60年・共同通信提供）

## 第4章 世田谷ゆかりの人

この年に公開された作家で、最も高額所得者は司馬遼太郎でしたが、それでも2億1504万円でした。毬子の所得額にも及びません。2位は「恍惚の人」が大ベストセラーになった有吉佐和子で、1億



6869 万円でした。

(実写版の磯野家)

(サザエは天海祐希、マスオは西島秀俊、カツオは濱田岳、ワカメ役は松岡茉優、タラオは成田凌、フネは市毛良枝、波平は伊武雅刀)



(福岡の銅像)

(参考)

2012 年（平成 24 年）5 月 27 日に、福岡市早良区の脇山口交差点から、シーサイドも



(福岡のサザエさん通り) (Yahoo Japan から引用)

もち海浜公園入口までの道路約 1.6 キロの通りに誕生しました。

### 人生を豊かに（雑学のすすめ）

#### 【人類の小さな一步は誤訳？】

1969 年 7 月 20 日（現地時間）に、アポロ 11 号の乗員が人類で初めて月面の土を踏みました。このとき 10 時 56 分に、船長のニール・アームストロングが、地上との交信で月面を踏んだ感想として有名な言葉を残しています。彼が月面で最初の一步を踏み出した時、That's one small step for man, one giant leave mankind（この小さな一步は、人類の大きな一步だ）と言いました。

しかしこの言葉は間違って伝えられたものだと、アームストロングは後で訂正しています。彼は、じつは不定冠詞の"a"を入れたのです。つまり彼は"for a man"（一人の男の……）と言ったのでした。それなのに、地上ではみんな"for man"（人類の……）と聞き違えたのです。当時のテレビ放送の日米同時通訳も確か"a"を抜かして訳されていたはずです。要するに、「私のような小さな人間の一步が、人類の大きな飛躍の第一歩になった」というほどの意味だったのです。

（戸板康二氏から）

### 耳寄り情報 シルバー川柳から

- ① 目には蚊を耳には蟬を飼っている
- ② 立ちあがり用事忘れてまた座る
- ③ 定年だ今日から黒を黒と言う
- ④ 欲しかった自由と時間持て余す
- ⑤ あの世ではお友達よと妻が言い
- ⑥ 三步あと歩いた妻は十歩先
- ⑦ 歌詞忘れラララが増した老人会
- ⑧ しかってもほほえみ返しの認知症
- ⑨ 温かく迎えてくれるは便座のみ
- ⑩ 紙おむつ地位も名誉も吸いとられ
- ⑪ 妻の留守醤油さがして一時間
- ⑫ 「私、誰？」妻に毎日試される
- ⑬ 失言は家庭内でも命取り
- ⑭ 物忘れ日々の暮らしが新しい
- ⑮ ペンギン歩きこんど転べばアザラシだ
- ⑯ 円満の秘訣ソーシャルディスタンス

心当たりの方がいると思います

以上